

博士の学位論文審査結果の要旨

申請者氏名 南 崎 眞 綾

横浜市立大学大学院医学研究科
看護学専攻 博士後期課程 老年看護学システム開発研究分野

審 査 員

主 査	横浜市立大学大学院医学研究科	赤 瀬 智 子
副 査	横浜市立大学大学院医学研究科	佐 藤 政 枝
副 査	横浜市立大学大学院医学研究科	中 村 幸 代

論文名

Development of Management Indicators of Nursing for Minimizing Physical Restraints Focused on Older Adult Patients Hospitalized in Acute Care Settings

急性期病院入院高齢者の身体拘束を最小限にする看護管理指標の開発

本文

学位論文の審査にあたり、以下のように発表が行われた。

序論

身体拘束は、本人が容易に調節したり取り外したりできないような方法で、本人の身体に接触して、本人の自由な身体の動きを妨げる行為を指す (Bleijlevens et al., 2016)。治療の中断予防、興奮状態にある患者の行動の管理等を目的として実施され、急性期病院入院高齢患者は身体拘束リスクが高い (Nakanishi et al., 2018)。尊厳尊重の観点からも、高齢患者への身体拘束は可能な限り回避することが望ましいが、看護師は安全の理由から高齢患者に対する身体拘束の防止や軽減の判断を難しく感じている (Yamamoto et al., 2006)。身体拘束最小化を目指すためには、身体拘束の最小化を看護師が判断、実践できるよう支援する必要があると考える。

急性期病院において身体拘束率を減少させた介入には、高齢者ケアの視点が入り入れられており、身体拘束最小化の事例報告では、看護師個人でなく組織としての取り組み内容が報告されていた。また、介護施設における身体拘束防止策の実践には、施設間のばらつきがあることが指摘されており (Abraham et al., 2019)、急性期病院も同様の様態であることが予測される。したがって、高齢者ケアの要素を取り入れ、各施設での取り組みの方向性を示す身体拘束最小化に向けた看護管理活動の視点が必要であると考え。本研究では、急性期病院における高齢者ケアの視点を取り入れた身体拘束を最小限にするための看護管理指標を開発することを目的とした。

1. 方法

文献検討、インタビューから身体拘束を最小限にするための看護管理に関する内容をコードとして特定し、帰納的に整理して指標項目内容を抽出した。指標項目内容を基に、各マネジメントレベルに応じた看護管理活動を示す指標として、トップマネジメントの暫定版指標、ミドルマネジメントの暫定版指標を作成した。老人看護専門看護師、身体拘束最小化経験のある看護管理者を専門家パネルとしたデルファイ法にて、3 ラウンドの暫定版指標の有効性評価を行い、指標を開発した。さらに、開発した指標の臨床における適用可能性を検討するため、ケーススタディ調査を実施した。なお、本研究において指標を支持する理論的枠組みとして、看護管理に関する理論 (American Nurses Association, 2009; Gillies, 1995) と経営管理の理論 (Fayol, 1966/1972) を参考に、急性期病院入院高齢者の身体拘束を最小限にする看護管理は、(1) 計画、(2) 動機付け、(3) 教育、(4) 指揮、(5) 組織化、(6) 統制の6側面の機能に分類されると仮定した。

2. 結果

文献検討、インタビューから 312 コードを特定し、コードを帰納的に整理して 44 の指標項目内容を抽出した。44 の指標項目内容を基に、トップマネジメントの暫定版指標 35 項目、ミドルマネジメントの暫定版指標 33 項目を作成した。各 50 人のパネリストのうち、トップマネジメントパネリスト 12 人、ミドルマネジメントパネリスト 13 人が 3 ラウンドの評価を完遂した。トップマネジメント指標 35 項目、ミドルマネジメント指標 28 項目で構成され、計画、動機付け、教育、指揮、組織化、統制の6分類に分けられた。

ケーススタディでは、看護管理者は指標全項目を評価し、【身体拘束最小化に向けた現在の問題を認識した】等 5 カテゴリーの取り組みを行い、【技術的に使いやすいと感じた】等 5 カテゴリーの感想が得られた。スタッフ看護師は、身体拘束最小化の取り組みに対して、【身体拘束最小化に向けた準備性の不足を感じている】等 5 カテゴリーの認識を持っていた。

3. 考察

本研究にて開発された急性期病院入院高齢者の身体拘束を最小限にする看護管理指標は、高齢者ケアの視点が入り入れられ、トップマネジメントとミドルマネジメントそれぞれで求められる役割が反映された。エキスパートパネルによって合意形成された指標項目は、看護管理の実践状況を判断したり評価したりするための看護管理者の活動の視点となり、身体拘束最小化に向けての取り組みにおいて臨床上の有用な示唆を提供できると考える。今後の課題として、指標間の構造の明確化、優先すべき指標項目の提示が必要であると考えます。

4. 結論

本研究において、急性期病院における高齢者ケアの視点を取り入れた身体拘束を最小限にするための看護管理指標（MaIN-PR）を開発した。看護管理者が MaIN-PR を活用することで身体拘束最小化を目指すために必要な看護管理活動の現状を判断・評価することが可能となる。

上記の内容の発表後、赤瀬主査、佐藤政枝副査、中村副査からの質問に対し、下記の応答がなされた。

(1) 研究背景

・身体拘束に関する課題、高齢者について述べているが、急性期、病院、看護管理者をキーワードとした本研究のオリジナリティについて説明してください。

回答:身体拘束ハイリスクな急性期病院に入院する高齢者への基本的なケアの徹底を実現するために必要な支援として、看護管理が実践すべきことを明らかにしたことが本研究の独自性であると考えている。

(2) 第 1 段階：指標項目内容の抽出および暫定版指標の作成

・トップマネジメント、ミドルマネジメントの 2 種類の指標を作成している。スタッフにもマネジメントは必要であるが、スタッフレベルでのマネジメントは検討しているか説明してください。スタッフも含めた展開や、小児領域や精神領域と比べて急性期病院高齢者に特化したところや共通性を今後検討いただきたい。

回答：2 種類の指標は当該職位の看護管理者単独で実践する内容とはなっておらず、互いが実践し合う中で看護部門として必要な看護管理実として 2 種類の指標を示した。病棟でのマネジメントに関わる主任・副師長や病棟への影響力が高いスタッフを巻き込むことが指標項目には含まれており、スタッフレベルでの関与についても記述している。

・3つの理論的枠組みを使用している。どのように構成し、整理したか記載すると良い。

(3) 第 2 段階：指標の開発

・デルファイ方法の対象者は GCNS、師長、部長となっている。結果を見ると GCNS が多くの割合を占めている。トップマネジメント、ミドルマネジメントはそれぞれの指標のみで、GCNS は 2 つの指標を同時に評価している。この点について、バイアスや限界をどう考えるか説明してください。

回答：GCNS は全体を見て両指標に高齢者ケアの視点として重要な内容が網羅されているか評価してもらうため、2 つの指標の評価を依頼した。それぞれの視点から判断して繰り返し評価するこ

とで合意形成ができたため、互いの不足している視点を補填したと考えている。

・デルファイ法の特徴、デザインを選択した利点と欠点をどのように補ったか説明してください。

回答：特徴と利点は、多くの専門家による合意形成によって科学的根拠を有した指標が開発できる点である。欠点はデルファイ法を質問紙調査で実施した点である。本研究では、アンケート調査結果と研究者間での協議結果をフィードバックして、次のラウンドの調査を実施することで、非対面調査の欠点を補足したが、対面であればパネリスト同士の活発な意見交換により議論が深まった可能性がある。

・デルファイ法における専門家のパネリストは、多様な専門家の意見による合意形成が重要であると思うが、本研究の選定基準と専門家パネルの多様性は十分であると考えてるか、説明してください。

回答：本研究で開発する指標が有効かを検討するために必要な視点は、高齢者看護を看護管理であると判断し、キーパーソンは看護管理者と GCNS と判断した。専門家パネル所属の急性期病院は、小中規模病院までが含まれ、施設規模という観点では多様性が確保されたと考える。

・序論で、身体拘束最小化には看護師の知識、認識、態度への肯定的変化が必要であると述べている。開発した指標の具体的にどれが看護師の知識、認識、態度に対して肯定的に変化すると考えたか説明してください。

回答：「動機付け」が主要な項目であると考えている。スタッフの姿勢を肯定的に評価することや、自己効力感の向上、成功体験の共有によって、身体拘束最小化の取り組みに対して内発的動機付けされ、スタッフの認識、態度を改善していると考ええる。

(4) 全体を通して

・身体拘束最小化を検討する上で、管理的内容、高齢者のケア視点を入れたのが本研究の新規性であり独自性と読み取れた。開発した指標の中で、何が先行研究と相違しているか、本研究の特徴的な部分はどれか、具体的に説明してください。

回答：身体拘束の未実施や撤回の判断につながる看護師の知識、認識、態度へ直接働きかける看護管理活動として、「動機付け」と「教育」が重要であると考ええる。「動機付け」という分類は、参考とした3つの理論では示されていなかった。アメリカ看護協会が示している看護管理者の指針に示されたカテゴリを統合した1つのカテゴリを示す必要があると考え、「動機付け」とした。身体拘束最小化の取り組みを特徴づける分類であると考ええる。また、身体拘束に関する知識向上を支援する内容が反映されたのは「教育」である。「高齢者ケア」や「せん妄」に関する教育について示し、高齢者の生活行動の選択を尊重する「日常倫理」の教育についても示している。これは特に高齢者ケアの視点を取り入れられた指標であると考ええる。

・専門家である研究者として、当該分野でこれを明らかにしたと主張できることが重要である。本研究の老年看護学における課題と研究の位置づけ、明らかにしたこと、意義が分かるように説明してください。

回答：本研究で明らかにしたことは、老年看護学分野の立場で、身体拘束最小化のために看護管理として何をすべきかを示したことである。

・研究全体の倫理的な配慮を説明してください。何のための研究なのか、倫理的な意味を認識したうえで、指針に沿って、本研究の遂行を考えるとよい。

その他の質問項目も含めて、質疑応答はいずれも適切な回答・内容であり、本研究は、博士（看護学）の学位に値するものと判断された。